

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「人生はノンストップ」

千葉県
長野 和夫

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ロンドン市内の日本料理店。テーブルをはさんで、ランチに招待した英国人の男性二人と女性一人がにこやかな笑顔を向けている。こちら側は、ロンドン駐在のわが社の支社長と先輩社員、そして東京から出張中の私の三人。

テーブルには、刺身と天ぷらの盛り合わせをメインにした和食膳が並べられ、英国と日本の料理や生活様式の違いなどを話題に、笑いの絶えない楽しい会食が続いた。だが、英語の苦手な私は、一人カヤの外。末席で静かに箸を動かしていた。

その時、衝撃の光景が目に映った。私の向かいに座る英国人の淑女が、刺身を盛った皿に添えてあったワサビのかたまりを、スプーンですくって、口に運ぼうとしていた。

私は、とっさに叫んだ。

「ストップ」

一瞬の静寂、全員の目が私に注がれた。淑女は、ワサビののっかったスプーンを手にしたまま、啞然としている。私は、あわてて隣の先輩に、「ワサビ」と目配せして、助けを求めた。先輩が「オー、クローズコール（危機一髪）」と、淑女に手を差しのべて、笑って事情を説明した。

「そのグリーンの添え物はワサビという強烈なスパイス。刺身の醤油に少し溶かして使うもので、そのまま口に入れたら大暴れますよ」

淑女は、「オーマイゴット、サンキュー、サンキュー。アイスクリームかと思ったわ」

英語の母国で、私が唯一発した英語（？）で事なきを得て、和気あいあいの談笑が戻った。帰りに、「あの場面、英語では何と声をかけますか」と、先輩に聞くと、慰めるように、「ストップでOKだよ」

私は、海外に出るたびに痛感する「英語をもっと勉強すべきだった」とのほろ苦い思いを、までも噛みしめた。

英語には、ずっと悩まされてきた。もともと語学センスがないのか、中学以来、英語は最大の苦手科目。日常会話もロクにできないまま、入学試験も入社試験も何とか潜りぬけたが、英語力のハンディーは、仕事や生活のあらゆる場面で“赤っ恥”をもたらした。

職場の机で電話が鳴る。受話器をとると「ハロー」。動悸を押さえて、さりげなく「グッバイ」と答えて受話器を置く。街で困った様子の外国人と目が合うと、素知らぬふりをして逃げる。

こんな英語オンチでも、仕事の都合で海外に出ることがあった。“ワサビ事件”に遭遇した一九八二年のロンドン出張は実に三週間に及んだ。先輩のアパートに居候して、まるで幼稚園児のように迷子にならないよう、どこへ行くにもピタリとくっついて歩いた。

そんな私に、先輩はバブやレストランでの注文などを命じて、悪戦苦闘ぶりをニヤニヤ眺めていた。

ロンドン滞在中も終盤になった頃、私のなかに小さな変化が起きていることに気づいた。レストランでの注文や店での買い物、割とスムーズにできるようになり、一人でロンドンの地下鉄にも乗れるようになっていた。

ロンドンで最後の日曜日、私は、東京を発つ前に会社の同僚から言われたことを思いだした。

「新潟の伯父が、いまケンブリッジで英語の勉強をしている。時間があつたら訪ねてみてくれ」

私は、先輩に断って、ひとり列車でロンドンから大学の街ケンブリッジに向かった。駅で出迎えてくれたSさんは元市議会の議長で当時七十一歳。

「外国へ行くたびに、自由に話せない悔しさを味わってきた」と、古希にして英国への語学留学を決断。アパートで自炊生活をしながら、英語学校で各国からやってきた孫のような生徒と一緒に「キングズ・イングリッシュ」の習得に励んでいた。

留学してまだ半年というが、「英語の勉強は凶々しさが一番だよ」と、Sさんは公園を散歩するお年寄りや街を歩く若者グループに、「ハウアユー」「エクスキューズミー」と話しかける。

「オレの英語は半分通じるし、相手の話も半分はわかるね」

街の上海料理店で上海炒麵（焼きそば）のランチをとりながら、Sさんにロンドンで英国淑女が刺身のワサビを口に入れようとしているのを見て、あわてて「ストップ」と叫んだことを話すと、Sさんは「そうか、たしかにワサビはアイスクリームと間違えられそうだな。一大事がストップできてよかった」と大笑い。

そして、「オレならなんと言ったかな。ストップではなく、日本語でそれはダメと手をふつたかもしれないな。なにしろストップなんて発想は、オレの人生にはないからね」

「人生にストップなし、ですか」

「そう、人生はノンストップ、前進あるのみ。終着駅もない。あの世までレールはつながってるよ。ましてや、学びの道にストップなし。歳などまったく関係ない。英語をマスターできたら世界を旅して、世界一周漫遊記を書くつもりだ。ハッハッハ」と、また豪快に笑った。

私は、Sさんの旺盛なバイタリティーに、「あの歳で、よくまあ」と、半ばあきれながらロンドンに戻ったことを思い起こす。

帰国後、「Sさんに負けないよう、英語のレッスンに通ってみるか」と、英会話教室のパンフレットを取りよせたりしたもの、仕事の忙しさにかこつけて、その決意はすぐに薄れ、ロンドンで覚えかけた英語の生活用語もあぶくのように消えてしまった。

それから三十余年の歳月が過ぎ、私も定年退職して古希を迎え、老境を辿る身となった。これといった趣味も持たず、毎日が日曜日の潤沢な時間を持て余す日々のなかで、あのケンブリッジで会ったSさんの“古希の挑戦”が記憶の底から甦った。

そして、「人生はノンストップ」の言葉が、惰性に流れる私の心を揺り動かした。

「ヒマを持って余している時ではない。何かできることはないか」

そう思い立って、手にとった市の広報誌に「まちづくり審議会の委員募集」の知らせを目にした私は、さっそく応募した。応募者が少なかったよう採用され、大学教授らの学識者や各種団体・業界の代表委員と一緒に市民代表として、まちを元気にするプランの策定に知恵を出し合っている。

もうひとつ、秘かに始めたのが宿敵「英語への挑戦」である。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、「英語でおもてなしを」と、英会話の勧めがかまびすしい。

「せめて道案内ぐらいは、英語でできるようにしたいものだ」。英語への関心がムクムクと湧いてきた私の心を、またもSさんの言葉が鼓舞した。

「人生はノンストップ、学びの道にストップなし」

「よし、今度こそ」と、決意も新たに、近所の書店で初級英会話のテキストを買い求めた。

「フムフム、こつちです、はジスウェイ。あつちです、はザット・ウェイか」

「まっすぐ行く、はゴー・ストレイト、左に曲がる、はターン・レフト。簡単、簡単」

Sさんの豪快な笑い顔が眼の裏に浮かびあがる。

「英語の勉強は、図々しさが一番だよ」

街で困っている様子の外国人を目にしたら、躊躇することなく声をかけてみよう。

「メイアイヘルプユー？」